

(2) 景勝地としての洛外

京都の三山の麓の地は風光明媚な景勝地として古来より多くの人々が訪れた。平安遷都以来これらの地には、自然豊かな風景を楽しむため、貴族の別荘や隠棲の居、門跡寺院などの寺社が営まれた。またその風景は和歌や物語などの文学や絵画などの中に描かれた。このような地は、次第に名所として意識されるようになり、室町時代には庶民がこれらの景勝地へ訪れるようになった。

江戸時代になると、絵で見て楽しむ「都名所図会」
などの発刊も手伝い、名所旧跡詣でが盛んになった。
洛外と呼ばれたこれらの地域は、三山の麓の美しい自
然の中に、寺社、庭園、史跡、あるいは和歌や物語な
どの文学の舞台のある場所として知られ、地方から多
くの人が京都を訪れた。そして、京都の人々は、京都
の案内記や、京都へ来訪した人々の中で定着した京都
を通してこれらの地を再認識し、来訪者を迎える営み
を続けてきた。

この項では、嵯峨野を具体事例として、京都の洛外の景勝地に形成されている歴史的風致を示していく。

ア 具体事例：嵯峨野への景勝地詣で

嵯峨野は、古来より景勝の地として知られてきた。嵯峨という地名が現れるのは、平安京が営まれて間もなくのことで、平安京の原型とした唐の長安の近郊にある景勝地「嵯峨山」（峨媚山）から得たのが地名の由来と言われている。この地域は、船岡山かぐらや神楽岡かぐらと並んで聖なる丘の一つとされた双ヶ丘、愛宕山あたごや小倉山おおいなどの山々、豊かな清流を湛える大堰川、一陣の風にさやさやと音を立てる竹林など、美しい自然に恵まれた地域である。

平安時代の嵯峨野は、貴族たちの狩猟の場だけではなく、美しい自然を愛で、そして親しむ別業地（別荘地）でもあった。

西園寺公経の別業地を足利義満が譲り受け、その没後に開山された金閣寺（鹿苑寺）、大徳寺実能が別業とした地に創建された竜安寺、光孝天皇の発願によって建立され宇多天皇が居を営んだ仁和寺、花園法王が別荘を喜捨して寺院とし、その後文明年間に中興された臨済宗大本山の妙心寺、嵯峨天皇が営んだ嵯峨院が元になった大覚寺、後嵯峨上皇が営んだ仙洞嵯峨御所に足利尊氏が創建した天龍寺など、嵯峨野をはじめとする洛西に点在する寺院の多くは、もとを辿ると皇族や貴族などの別業地を前身として

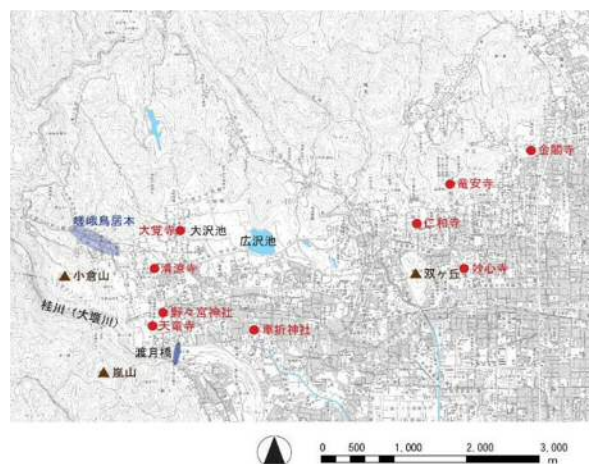


図2-66 嵯峨野の景勝地



写真2-112 西山から大沢の池、広沢の池

いる。

これらの寺社や庭園をはじめ、嵯峨野に広がる田園風景や農家、街道筋に立ち並ぶ民家などと美しい自然とが融合し、洛中とは一味違う洛外の伸びやかで美しい景色が織り成されてきた。

そして、この嵯峨野は、様々な和歌や物語、謡曲ようきょくの舞台となった。例えば、「源氏物語」の「賢木」さかぎの巻では、六条御息所の娘の斎王の潔斎地けっさいとして嵯峨野の野宮が描かれている。「ものはかなげなる小柴垣」「黒木の鳥居どもさすがに神々しう見え」と描かれた野宮神社は、黒文字の枝を竹に結んだ垣根、黒い樹皮をそのままに立てた黒木の鳥居のたたずまいを持ち、物語の中の野宮の遺風いふうを今日に伝えている。また、明石女君が来京した際の住居が大堰川の川べりに設定されており、光源氏が「大覚寺の南」に造作した「嵯峨野の御堂」（現在の清涼寺の地）せい か かんにあった棲霞観がモデルとされている）にかこつけて明石女君に会いに行く様子が描かれている。かつての大堰川の船遊びを偲ぶものとして、昭和3年に創始された車折神社の「三船祭」では、川面に浮くまざき